

ゴホウラ腕輪・イモガイ腕輪の語るもの

— 隈・西小田遺跡の出土品から —



写真1 隈・西小田遺跡の被葬者に伴ったゴホウラ腕輪と鏡・鉄剣・鉄戈(第13地区23号甕棺)

福岡県や佐賀県で弥生時代の墓地を発掘調査すると、大型の巻貝で作った腕輪をはめた人々がみつかることがあります。この腕輪に使う貝は玄界灘や有明海ではなく、はるか南の熱帯の海に生息しているゴホウラとイモガイという巻貝です¹⁾。遠い地域の貝殻をつかった腕輪について、これまでに次のようなことがわかっています。

- ・ゴホウラとイモガイは沖縄諸島で採取され、奄美諸島・トカラ列島を島伝いに北上し、南九州を介して北部九州に届けられていた。

- ・ゴホウラ腕輪は成人男性の右腕に、イモガイ腕輪は成人女性の両腕または左腕にはめられることが多い。

筑紫野市の隈・西小田遺跡は、筑前・筑後・肥前の平野を繋ぐ地(三国丘陵)にある大規模な遺跡です²⁾。ここに弥生人たちのムラや墓がありました。発掘調査によって1500基以上の甕棺墓がみつかり、その中の7基にゴホウラとイモガイの腕輪が伴っていました。

写真1はその代表例です。被葬者の男性が実際に腕にはめていた腕輪41個を、右腕の21個(写真の右側)と左腕20個(同左側)に分けて並べています。この男性はこのほかに鉄剣と中国前漢の鏡、鉄戈を持っており、黒く塗られた立派

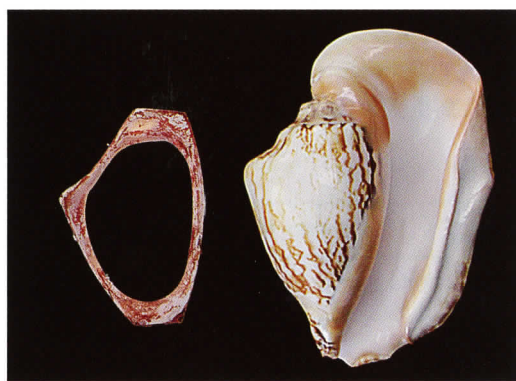


写真2 ゴホウラ腕輪(左)とゴホウラ貝殻(右)

な甕棺に葬られていました。これほどの数の腕輪を、しかも両腕にはめているのは極めて稀なことです。彼はこの地域の首長であったに違いありません。写真3もゴホウラ腕輪をはめた例で、上の例より少し古い時期のものです。右腕に8個の腕輪をはめ、銅剣もっています。

この二つの甕棺出土品は、ゴホウラ腕輪の立派さや副葬品の質の高さ、甕棺の造りの良さから一括して国の重要文化財になっています。

表1は、隈・西小田遺跡でみつかったゴホウラ腕輪とイモガイ腕輪の一覧です。これによると

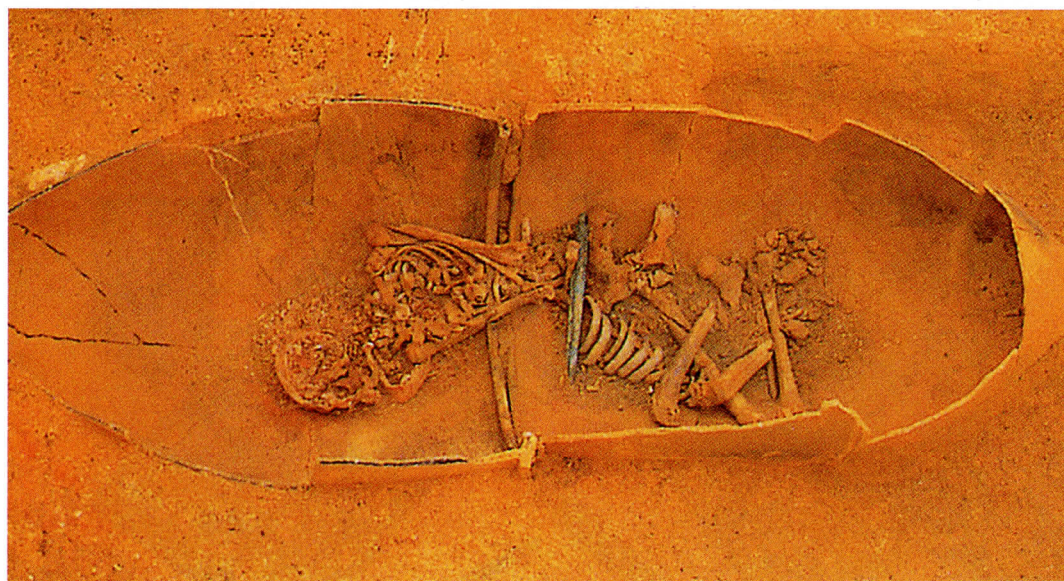


写真3 ゴホウラ腕輪を右腕にはめた被葬者(第3地区109号甕棺) 左が頭

腕輪はもっぱら弥生時代中期に作られています。中期前半にはゴホウラ腕輪ばかり使われますが、後半にはイモガイ腕輪も加わっています。表1no.6(以下表1no.)のイモガイ腕輪をはめていたのは、その大きさからみて女性でしょう。ゴホウラ腕輪の数に注目すると、1人のはめる数が時期を追って増えていることがわかります。no.4のゴホウラ腕輪は、佐賀県吉野ヶ里遺跡のゴホウラ腕輪と共通した特徴をもっており、no.7のイモガイ縦型腕輪は、同じく佐賀県の姫方遺跡のものと同じ部分まで似ています。no.1のゴホウラ腕輪は、呼子など沿岸地域の人々の腕輪に共通しています。筑紫野の弥生人が佐賀の弥生人と親しかったことを、腕輪は語ってくれています。(木下尚子)

表1 隈・西小田遺跡出土の琉球列島産大型巻貝の腕輪一覧

no.	時期(弥生時代)*	貝製腕輪・数	着装腕の左右	ゴホウラ腕輪数	イモガイ腕輪数	被葬者	副葬品	甕棺墓no.	備考
1	中期前半1	ゴホウラ・1	不明	1		成人性別不明		5-64	
2	中期前半1	ゴホウラ諸岡型・1	不明	1		男性熟年		5-68	
3	中期前半2	ゴホウラ諸岡型・8	右	8		男性熟年	細形銅剣1	3-109	国の重要文化財
4	中期前半2	ゴホウラ諸岡型・6	右	6		男性熟年		2-513	
5	中期後半	ゴホウラ立岩型・41	右21左20	41		男性成人	銅鏡1、鉄剣1、鉄戈1	13-23	国の重要文化財
6	中期後半	イモガイ横型・10	不明		10	成人性別不明		8-15	
7	中期後半	イモガイ縦型・1	不明		1	小児		10-224	

* 中期前半1を橋口達也編年Ⅱb、中期前半2を同Ⅱc、中期後半を同Ⅲbとして表記

注

(1) スイショウガイ科のゴホウラ *Strombus latissimus*; *Strombus (Tricornis) latissimus* Linnae とイモガイ科の大型貝類(アンボンクロザメ *Conus litteratus*; *Conus (Lithoconus) litteratus* Linnaeus 等) です。

(2) 1983~88年に面積53haの発掘調査が行われました。草場啓一編1993『隈・西小田地区遺跡群一隈・西小田土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報一』筑紫野市埋蔵文化財調査報告書第38集